

藤井厚二研究

— 藤井家および藤井厚二を巡る人々 —

宮地 功* 松本 静夫*

Study on Architect Fujii Koji

— The Fujii Family and His Surroundings —

Isao MIYACHI* Shizuo MATSUMOTO*

ABSTRACT

Fujii Koji (1888~1938), Takeda Goichi(1872~1938), Tanabe Junkichi (1879~1926) were famous architects who had relations to Fukuyama. They graduated from Tokyo Teikoku University. Fujii Koji was a professor architect. The Fujii family was carrying on business before the Edo era, and Yoichiemon (Koji's father) extended his operations in Fukuyama. The Fujii family had many industrial arts, antiques etc. Koji got married with Senge Tosiko who was a daughter of Senge Takatomi (the chief priest of Izumo Taisha). He had intimate acquaintance with many intellectuals, artists, famous writers etc. Nishikawa Issotei was one of them. They influenced each other in their cultural and art issues.

キーワード : 藤井厚二、藤井家、売立、千家家、西川一草亭

Keywords : Fujii Koji, The Fujii family, Auction, The Senges, Nishikawa Issotei

1. はじめに

藤井厚二は、武田五一¹⁾、田辺淳吉²⁾とともに、福山ゆかりの著明な建築家である。ともに東京帝国大学建築学科を卒業し、武田五一は京都帝国大学建築学科の創設に関わり、藤井厚二も武田五一の意を受けて、49歳で死去するまで、教授を勤めた。

藤井厚二は、京都大山崎に1万2千坪の土地を購入し、そこに4度にわたって自邸を建て、自らそこに住みながらさまざまな実験を行った。彼はこのように実験に基づいた科学的な分析を行い、建築環境工学の先駆となった。

藤井厚二にはこうした科学的な面だけでなく、藤焼と称して自ら陶器を焼き、茶の湯を嗜み、テニス

*建築学科

などスポーツも万能であった。このような潤沢な資力と多才な趣味、才能をあわせ持つ藤井厚二の生家藤井家、彼を取り巻く人たちについて考察する。

2. 藤井厚二略歴

1888年(明治21年)12月8日

広島県深安郡福山町字深津町(現在の福山市宝町)で藤井与一右衛門と元の次男として生まれる。10歳で父と死別、兄祐吉が13歳で家督を継ぐ。

1907年(明治40年) (19歳)

福山中学(現在の福山誠之館高等学校)³⁾を卒業
同級生に森戸辰男⁴⁾がいた。

1910年(明治43年)7月 (22歳)
第6高等学校(岡山)卒業

1913年(大正2年)7月 (25歳)
東京帝国大学工科大学建築学科卒業
同級生に堀越三郎、佐藤四郎などがいた。

1913年(大正2年)10月 (25歳)
合名会社竹中工務店入社、神戸勤務となる。

1915年(大正4年) (27歳)
大阪朝日新聞社社屋設計担当
大阪朝日新聞社設計顧問に武田五一がいた。

1918年(大正7年) (30歳)
千家壽子(出雲出身)と結婚

1919年(大正8年)5月 (31歳)
竹中工務店退社

1919年11月~1920年8月
欧米視察

1920年(大正9年)12月2日 (32歳)
京都帝国大学工学部講師に就任

1920年(大正9年)12月10日 (33歳)
武田五一の補佐として京都帝国大学大講堂設計
事務を嘱託される

1921年(大正10年)5月 (33歳)
京都帝国大学工学部助教授に昇任

1926年(大正15年)4月1日 (38歳)
工学博士学位取得
学位論文「我国住宅建築の改善に関する研究」

1926年(大正15年)5月30 (38歳)
同教授に昇任し、建築学第四講座(建築設備)
を担当

1938年(昭和13年)7月7日 (49才)
直腸がんのため死去
戒名 淳風厚道居士

3. 藤井家について

藤井厚二の生家である藤井家は十数代にわたり造酒屋「くろがねや」を営んでいた。慶応年度の藤井家文書には、「鉄屋藤井家の土地所有並びに金融大勘定土地所有」として、土地90町14畝9歩、利銀217貫20匁、諸方利払153貫583匁の記述があり、造酒屋だけでなく、広大な土地を持ち、金融業も行う豪商であった。

1897年(明治30年)には藤井与一右衛門が納税額3141円で広島県1位になっている。父与一右衛門は明治31年(1898年)に死去し、兄祐吉が家督を継いでいる。明治以降も備後地域を中心にして、製塩業、金物商、銀行、電力会社、紡績会社など多くの事業を展開している。以下、主なものについて述べる。

1877年(明治10年)備後各郡の諸上納銀並払銀の取扱方に指名される。

1879年(明治12年)福山綿会社を設立している。

1878年(明治11年)第六十六国立銀行創立され、1885年(明治18年)には藤井与一右衛門が取締役に就任している。同行は、1920年(大正9年)合併により芸備銀行(現広島銀行)となる。

1895年(明治28年)10月に、尾道貯蓄銀行を設立し、藤井与一右衛門が取締役に就任している。同行は1922年(大正11年)に普通銀行に転換し、尾道銀行となる。

1896年(明治29年)4月には、福山銀行を設立し筆頭株主として藤井与一右衛門が取締役会長に就任している。同行は、1927年(昭和2年)に第一合同銀行(現中国銀行)と合併した。

1896年(明治29年)10月に福山貯蓄銀行を設立し、筆頭株主として藤井与一右衛門が取締役に就任している。同行は、1920年(大正9年)岡山合同貯蓄銀行と合併した。

1893年(明治26年)5月には、福山紡績を設立、藤井与一右衛門が頭取に就任している。1903年(明治36年)に大阪の福島紡績と合併した。

その他、1883年(明治16年)に、藤井与一右衛門の事業として、清酒醸造業、福山物産操綿改会社、松永村製塩場、金物商の記述がある。1912年(明治45年)の「福山商工案内」には、博愛生命保険株式会社代理店主任、藤井農業合資会社代表役員、藤池合資会社無限責任社員、福山公園保存會財團理事に藤井与一右衛門の名前がみられる。

1922年(大正11年)に、藤井与一右衛門(祐吉)が福山電気(株)を設立し、単一事業所のみへ電気の供給を行ったとあるが詳細は不明。

また、1916年(大正5年)には、福山商業會議所が創立され、創立委員のなかに、藤井与一右衛門がいる。

以上のように、明治20年代を中心として藤井家は福山において多種の事業を展開している。

4. 藤井家の売立について

昭和に入り、藤井家は所有する書画、骨董の売立を行い、電気事業の展開資金にあてたとされている。

売立は、1933年(昭和8年)10月、12月の2回にわたり大阪美術倶楽部において行われた。この二回の売立に出品された主要なものは、目録「広島県 藤井此君園氏所蔵品入札」および「広島県 藤井此君園氏所蔵品第2回入札」に記載され、総計二千点近い品目があり、それらの運搬には貨車三台が必要であったと言われている。その中には、「本手

御所丸茶碗」など貴重なものが数多く含まれていた。第1回の売立金だけで、当時の福山市の財政規模にほぼ匹敵するものであった。

この時に出品されたものの内の主なものでは次のようなものがあげられる。

茶碗：本手御所丸茶碗 藤屋伝来⁵⁾、長次郎赤茶碗 呼銘 常盤 利休所持、青井戸茶碗 呼銘 みとり、など

香合：呉州松皮菱香合、古染付張子牛香合、など

棗：利休判黒棗、宋全一閑張菊棗など

茶杓：利休茶杓、宋全共筒茶杓など

水指：萬曆赤絵榭水指、祥瑞一閑人山水花鳥丸紋絵共蓋水指など。

霰釜：古天明姥口尾垂釜など。

絵画：傳又兵衛 浮世絵中屏風一双、竹田 淡彩花鳥、木米 松下煎茶竹田讚、山陽 七絶詩画三幅対、山陽 水墨山水画讚、山陽 修史七絶など

第二回の売立にも同様に多くの名品が出されている。



図-1 御所丸茶碗

5. 藤井家をめぐる文化的環境について

父与一右衛門は、「徽泉、士貫、椿荘」などと号し、祖父廣喬も、「竹甫」と号し、親戚には、福山の有名な画家、藤井松山（明治 13.10.20 生～昭和 42.1.21 没）がいる。松山の祖父佐一郎廣徽は厚二の祖父与一右衛門廣喬の姉婿であり、妻は廣喬の孫（厚二のいとこ）である。松山は7～8歳のころから藤井松林について丸山派の画を習い、松林の没した明治 29 年以降は京都に遊学し、鈴木松年に入門して疎水のほとりに住み、画業に専念している。

昭和 9 年(1934)福山に帰り、戦後しばらくは三之丸町の本藤井家の別荘に疎開している。帰福後もひたすら絵の道に精進し、その作品は地方の人々に愛蔵されている。作品は、日本美術院展などに出品して高く評価され、特に能絵に優れた作品を残している。伊勢神宮文化殿の能舞台造築時には、舞台の

鏡板への松の揮毫を依頼されたが、老齢のため辞退している。昭和 53 年には門人達により「松山画集」が刊行され、刊行発起人の中に藤井与一右衛門の名がある。このように松山は厚二の死後も引き続き本藤井家との親交があった。また、厚二と松山は、厚二が京大講師として赴任する大正 9 年(1920)から 14 年間の間お互い京都に在住して、親交があった。

このように藤井家当主の多くは雅号を持ち、土地などの不動産だけでなく多くの書画、骨董も所有していた。松林が「幼い頃には、重箱に御馳走をつめて、朝暗いうちから能見物に連れて行かれた」と語っているように、厚二も幼いころから、同様に芸術、芸能、古今の名品に囲まれて育ったことは、想像に難くない。

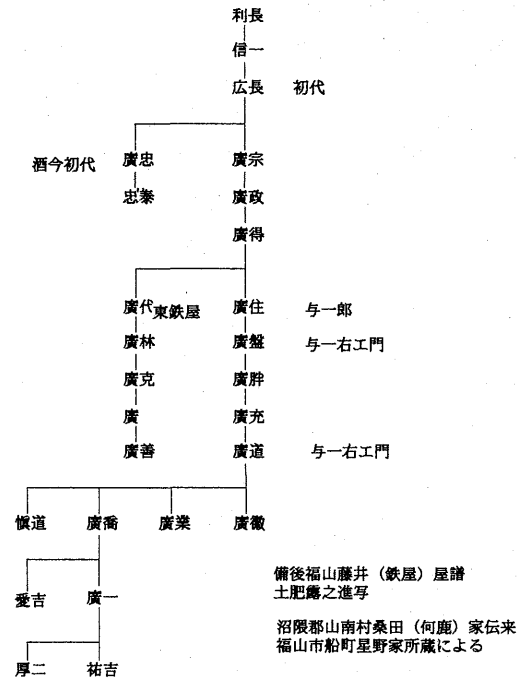


図-2 藤井家系図

6. 藤井家の人々

藤井厚二の父与一右衛門（廣一）は、藤井廣喬（与策）の長男として生れた。藤井廣喬には、2男4女がおり、第5子が長男廣一、末子が愛吉（明治元年生）であった。廣一は文久2年(1862)に改名し 13代藤井与一右衛門となった。与一右衛門には、2男1女がおり、長男祐吉（明治 19 年生）、次男厚二（明治 21 年生）、末子が長女であった。

父与一右衛門は明治 31 年(1898)1 月 19 日、厚二が 10 歳の時に死去し、兄祐吉が家督を継いでいるが、祐吉が若年であるため、父の弟である愛吉が与策と改名し公職を引き継いでいる。

藤井厚二には、長女福子（とみこ）（大正 10 年

9月13日生)、次女章子(大正12年10月13日生)、三女幸子(大正14年生、昭和2年没)、長男祐三(昭和5年生、昭和18年没)がいた。

長女福子は、藤井厚二の没後、昭和18年に馬場知己と結婚している。馬場知己は昭和13年に京大建築学科を卒業した、いわば藤井厚二の最後の教え子である。馬場知己は卒業後に鉄道省に入り、昭和32年には、「国鉄川崎発電所」の設計で、日本建築学会賞作品賞を受賞している。また、知己の長男馬場康夫は、映画監督として現在活躍している。

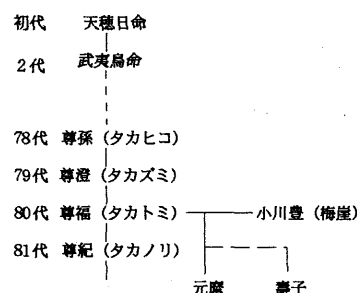


図-3 出雲大社系譜、千家家系図

7. 千家家について

藤井厚二は、1918年(大正7年)30歳の時に、千家尊福(タカトミ)の娘千家壽子と結婚している。

千家尊福(1845年9月7日(弘化2年8月6日)生まれ、1918年(大正7年)1月3日没)は第80代出雲大社大宮司出雲國造(いづもこくそう)であり、明治8年おこった「祭神論」論争において、破れはしたが出雲派として伊勢派に対し論争を行っている。また、明治15年には、出雲大社教会を出雲大社から分離し、初代出雲大社教管主についている。

1884年に男爵の爵位をうけ、貴族院議員にも4選されている。文部省普通学務局長、埼玉、静岡県知事、東京府知事を歴任、1908年(明治41年)には、第12代第1次西園寺公望⁶⁾内閣の司法大臣に就任している。

千家尊福は詩人としても高名で、小学校唱歌「1月1日」の作詞者であり、駒沢小学校、加須小学校、両国小学校などの校歌の作詞も行っている。

また、尊福の妻、小川豊も梅崖と号し、画家として高名である。

壽子には藤井厚二と同年の兄、千家元麿(1888年(明治21年)6月8日生まれ、1948年(昭和23年)3月14日没)がいる。元麿は、17歳頃から詩を河井醉茗、短歌を窪田空穂に、俳句を佐藤紅緑に師事し、後に白樺派の武者小路実篤らの影響をうけて詩作をはじめ、口語風の詩風を確立した。

元麿は白樺派を中心として、白鳥省吾、川路柳虹、室尾犀星、萩原朔太郎、佐藤そう之助、福田正夫、百田宗治、福士幸次郎、志賀直哉、有島武郎、里見とん、長与善郎、木下利玄、柳宗悦、高村光太郎、倉田百三、岸田劉生、木村莊八、中川一政、尾崎喜八等と交友があった。

なかでも岸田劉生は、著書の装幀を行い、「千家元麿之像」(1913)、「千家元麿像」(1913)、(油彩カンヴァス)の作品もある。

8. 西川一草亭について

西川一草亭は、1878年(明治11年)1月12日京都において花道「去風流」の家元に生まれ、10代なかばで、第7代家元を継承した。2歳下には弟亀吉(津田青楓)がいる。

西川一草亭は、花道だけでなく、絵画、習字を学び、美術、工芸にも造詣が深く、庭園や茶室を創ったり、「茶心花語」、「風流生活」、「風流百話」など著書も多い。昭和5年からは伝統文化研究誌として「瓶史」を発刊した。

西川一草亭には京都だけでなく、阪神、東京にも多くの社中がいた。藤井厚二(大正16年入門)¹²⁾も、婦人壽子(大正13年入門、千家男爵の息女)¹²⁾と共に西川一草亭に師事しており、他にも浅井忠、高安月郊、都鳥英喜、幸田露伴、加賀昌子(加賀豊三郎三女)、吉川元光(旧岩国藩主)などの文化人、著名人が多数いた。また、交友関係も広く、西園寺公望、富岡鉄斎、九条武子⁷⁾、武田五一、夏目漱石らとの交流もあった。

また、「瓶史」には、藤井厚二の「床の間の話」と題した一文が掲載されている。「瓶史」の執筆者、座談会などへの参加者を見ると、西田幾太郎、和辻哲郎、長谷川如是閑、堀口捨己、谷川徹三、志賀直哉、新村出、濱田青陵、室尾犀星、板垣鷹穂、吉田鉄郎、天沼俊一、安部能成、里見とん、幸田露伴、九鬼周造、武者小路実篤、河井寛次郎、佐藤春雄、茂山千五郎、谷口吉郎、藤井厚二、パーナードリーチ、北大路魯山人など当代を代表する文化人、芸術家、文人などの名前が連なっている。

このように、西川一草亭は、京都において文化的な中心をなしていた文化人であり、ある種の知識共有体、文化サロンを形成していた。

西川一草亭は、生花の本質は花の個性を生かし、作者の考えによる新しい插花芸術の創造であるとし、流儀花からの脱却をはかった。花屏風なるものを考案し、増加する洋間にいち早く対応するなど、時代に即応した自由な新しい芸術活動を行っていた。

また茶の湯についても、茶の湯は本来日常生活に根ざしたもので、薪水の労を親らすることにあり、茶器なども、自分自身の目で見て美を感じたものであればよいとし、所謂名物などには全くとらわれない自由な発想の取り組みを行っていた。

茶室においても、にじり口をなくしたり、床の間にも旧来のように特別の意味合いを持たせず、のびのびした広い空間を創っている。

これは、藤井厚二の最後の実験住宅である「聴竹居」の下閑室に通じるところがある。

また、西川一草亭は庭は障子を額縁としてみるのが良いと言うが、「聴竹居」の縁側から望む風景がまさしくそれにあたる。

藤井厚二の実験住宅の近くには、妙喜庵、加賀家大山崎山荘⁸⁾があり、西川一草亭が昭和7年には吉川子爵とともに山崎妙喜庵を訪れ、昭和8年には加賀家大山崎山荘、水無瀬神宮で春期大会を行っている。

西川一草亭は、死の直前まで精力的に活動を続け、「風流一生涯」の言葉をのこし1939年(昭和14年)に死去した。



図-6 下閑室にじり口

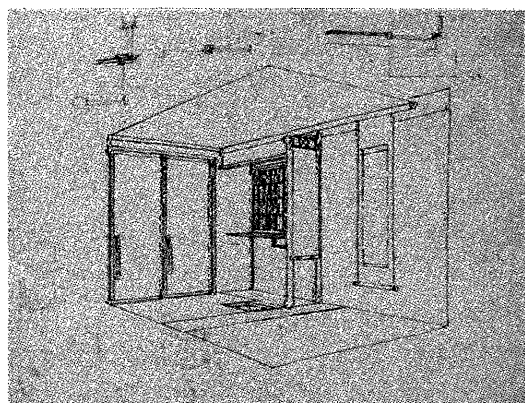


図-7 下閑室床の間スケッチ 11)

9. まとめ

このように藤井厚二は、素封家の家に生まれ、幼

少時から美術工芸品に囲まれ、文化芸術的な雰囲気の中で育った。また、大山崎に12000坪の土地を購入し、実験住宅と称し10年余りの間に、5回も自宅を建てるなど経済的にも恵まれていた。

前述のように、文人、学者、芸術家など当代の著名人たちとの幅広い交流を行なっている。

また、京都帝国大学では、研究、設計活動のほか、学術誌「建築学研究」の発行の支援を行うなど、学術的分野においても精力的に活動を行ない幅広い人脈を持っていた。

西山卯三が藤井厚二を「貴族趣味」と評しているが、素封家の家に生まれ、このような芸術、文化的な雰囲気の中で育ち、多くの文化人との幅広い交流は、建築家藤井厚二の思想、作品を形成するうえで大きな影響をあたったことは十分に推測できる。

【注 釈】

- 1) 武田五一
 - 1872年(明治5年) 広島県福山市生まれ
 - 1897年(明治30年) 東京帝国大学工科大学造家学科卒業
 - 1899年(明治32年) 東京帝国大学大学院退学 同大学助教授就任
 - 1901~1903年 欧米視察
 - 1903年(明治36年) 京都高等工芸学校図案科主任
 - 1919年(大正8年) 京都帝国大学工学部建築学科創設
 - 1920年(大正9年) 同大学教授
 - 1938年(昭和13年) 没
- 2) 田辺淳吉
 - 1879年(明治12年) 東京市生まれ
 - 1903年(明治36年) 東京帝国大学工科大学建築学科卒業
 - 1903年(明治36年) 清水組入社
 - 1909年~1910年(明治42~43年) 欧米視察
 - 1913年~1920年(大正2年~9年) 清水組技士長(5代目)
 - 1921年(大正10年) 中村田辺建築事務所開設
 - 1926年(大正15年) 没
- 3) 県立福山中学(現広島県立福山誠之館高等学校)
 - 1786年(天明6年) 福山藩藩校「弘道館」創設
 - 1855年(安政2年) 「誠之館」開学
 - 1879年(明治12年) 県立福山中学設立
 - 1887年(明治20年) 尋常中学福山誠之館
 - 1893年(明治26年) 福山尋常中学へ改称

1897年(明治30年) 広島県第2尋常中学校
1899年(明治32年) 広島県第2中学校
1901年(明治34年) 広島県立福山中学校
1927年(昭和2年) 広島県立福山誠之館中学校

4) 森戸 辰男

1888年(明治21年) 12月23日生
1907年(明治40年) 3月31日
福山中学校卒業、第一高等学校入学
1914年(大正3年) 7月
東京帝国大学法科大学経済学科卒業
1914年(大正3年)
東京帝国大学法科大学助教授
1946年(昭和21年) 4月 衆議院議員当選
1947年(昭和22年) 6月
~1948年(昭和23年) 10月19日
文部大臣(片山内閣、芦田内閣)
1950年(昭和25年) 4月
~1963年(昭和38年) 3月 広島大学学長
1971年(昭和46年) 10月 福山市名誉市民
1984年(昭和59年) 5月28日 没

5) 御所丸茶碗

藤井家伝来の茶碗で銘「由貴」
1987年に開館した湯木美術館に所蔵されている。湯木美術館には日本料理「吉兆」の創業者湯木貞一の重要文化財もふくむ茶の湯コレクションが多数所蔵されている。
湯木は西川一草亭と交流があり、アサヒビール山本氏も吉兆の支援者の一人であった。

6) 西園寺公望

1849年(嘉永2年) 10月23日
京都 徳大寺公純の次男生
1906年(明治39年) 1月7日
~1908年(明治41年) 7月14日
第12代 第一次西園寺公望内閣
1911年(明治44年) 8月30日
~1912年(大正1年) 12月21日
第二次西園寺公望内閣
1920年(大正9年) 坐漁荘建てる
1940年(昭和15年) 11月24日没
文学にも造詣が深く、田山花袋、森鷗外、島崎藤村、幸田露伴、国木田独步など多くの文学者を自宅に招き、清談会「雨声会」を主催した。
西川一草亭とも交流があった。

7) 九条武子

1887年10月20日生~1991年2月7日没
歌人、九条良致の妻、西本願寺明如(光導)門主の次女、大谷光瑞の妹

1907年(明治40年) 仏教婦人会連合本部長に就任後、鏡如(光瑞) 婦人籌子(かずこ)を助け、近代仏教婦人会を創成した。
また京都女子大学の設立に尽力し、その結果1934年(大正9年) 京都女子高等専門学校が創設された。
短歌を佐々木信綱に師事し、花道を西川一草亭に、また絵画を上村松園について学んだ。

8) 大山崎山荘

加賀正太郎⁹⁾が京都府大山崎町の16000坪の土地に1912年(大正元年)~1932年(昭和7年)にかけて建設した別荘で、各界の名士のサロンであった。
1915年(大正4年)には夏目漱石も訪れる。
1996年(平成8年)に、京都府、大山崎町、アサヒビールにより「アサヒビール大山崎山荘美術館」となる。

山本(為三郎)¹⁰⁾ コレクションなどを展示。

9) 加賀正太郎(1888年~1954年)

大阪の実業家
1934年(昭和9年) 竹鶴政孝らと大日本果汁(株)(現ニッカウイスキー(株))の設立

10) 山本為三郎(1893年~1996年)

アサヒビール初代社長
昭和初期には、柳宗悦の民芸運動を後援するなど、芸術文化活動の支援を行った。山本コレクションには、河井寛次郎、濱田庄司、バーナード・リーチ、黒田辰秋などがある。
また、加賀正太郎とも親交があった

11) 聴竹居実測図集 竹中工務店設計部編より

12) 瓶史 西川一草亭

【主要参考文献】

福山市史編纂室 : 福山市史(下)、1978
中国電力(株) : 中国地方電気事業史、1974
藤井正夫 : 備後福山社会経済史、1974
(株) 広島銀行 : 創業百年史、1979
福山商工会 : 福山商工案内、1912
藤井松山画集刊行会 : 松山画集、1978
土肥露之進 : 備後福山藤井(鉄屋)家譜
濱本鶴寶 : 福山藩の文人誌、1988
京都大学工学部建築学教室六十年史
竹中工務店設計部編 : 環境と共生する住宅「聴竹居実測図集」 2001
西川一草亭 瓶史 1930~
目録「広島県 藤井此君園氏所蔵品入札」
目録「広島県 藤井此君園氏所蔵品第2回入札」
吉田紀美子 : 西川一草亭の研究 1988